

がん CT 画像読影のひきだし

稲葉吉隆, 女屋博昭, 清水淳市, 前田章光(編)

がん研究会有明病院薬剤部

青山 剛

「CT 画像の読影」という知識(共通言語)を得て、臨床力をアップデート

このたび、『がん CT 画像読影のひきだし』が出版された。『がん薬物療法のひきだし』(2020年)、『医薬品情報のひきだし』(2020年)に続く、「ひきだし」シリーズの第3弾である。今回の『がん CT 画像読影のひきだし』は、CT 画像について「何を考えながら」「どのように」読影すべきか、そのポイントをわかりやすく解説した入門書である。まず驚くのは、医師と共に薬剤師も編集に加わっている点である。評者の薬剤師としてのキャリアは20年になるが、学生時代に画像について学んだことはなかった。画像読影がテーマの本で薬剤師が中心メンバーとしてかかわっていることに、評者も少なからず刺激を受けたのだ。

本書は「初心者が画像読影のスキルを伸ばし、症例検討会の議論やカルテの記載内容の理解を深め、結果的に患者の病態をより深く把握できるようになる」ことを目的に刊行されたという。本書には多数の CT 画像が掲載され、丁寧な解説も加えられており、これからこのテーマについて学びたい若手医師や、薬剤師、看護師が理解しやすいように工夫されている。冒頭の「総論」以降の目次は、「正常画像」「治療効果の判定」「腫瘍の見落としを防ぐ」と続き、以降は本書のキモともいえる「臓器別、臨床課題別のがん CT 画像読影のポイント」に本書全体の7割のボリュームが割かれている。

2 段目(本シリーズではタイトルの「ひきだし」にちなんで、「章」ではなく「段目」を使用している。すなわち、他の書籍でいう第2章)の「正常画像」では、紙媒体の書籍に加えて動画からも学ぶことができる(QRコード付き)。紙面からだ

けではどうしても理解が行き届かない正常画像が動画で(行きつ戻りつ)学べるのは大変ありがたい。

5 段目「臓器別のがん CT 画像読影のポイント」では、肺がん、消化器がん、泌尿器がん、リンパ腫の特徴的な画像について解説があり理解が深まる。臓器別ごとに症例を用いて TMN 分類を行うトレーニングも実践的だ。

本書で評者が特に素晴らしいと感じたのは、6 段目「臨床課題別のがん CT 画像読影のポイント」である。ここでは、例えば肺炎、肝、腎障害、下痢、便秘、血管新生阻害薬などの「臨床で直面する課題」の症例が取り上げられている。例えば、「血管新生阻害薬の投与を控えるべき症例」はカンファレンスでよく聞くこともあり、自らの経験と引き付けながら臨場感をもって読んだ。

前出の編者たちの意図(刊行の目的)は本書においてしっかり達成されている。この『がん CT 画像読影のひきだし』を通読すれば、これまで自らの学問的基盤や視点を生かしてがん治療に関与してきた各専門職(医師、薬剤師、看護師)に「CT 画像の読影」という知識(共通言語)が加わることになる。臨床力アップデートのためにまさにオススメの書籍である。



●B5/頁240/2022 年
定価 : 4,950 円
(本体4,500 円 + 税10%)
[ISBN978-4-260-04928-3]
医学書院 刊